



成人向け  
輪姦暴虐小説

玩具にしてください！

変態女子校生・菜津希

あんぷらぐど  
荒縄工房

輪姦暴虐小説

玩具にしてください！

変態女子校生・菜津希

あんぷらぐど著

荒縄工房・発行



本作品はすべてフィクションであり、実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。また、特定の個人、団体、宗教、人種、性別などを誹謗中傷する意図はありません。

あんぷらぐど

SM雑誌に「仲ゆうじ」名でSM小説を執筆して作家活動をスタート。その後、編集の仕事に携わる。九〇年代よりネットで複数のペンネームで小説を執筆。二〇一一年「荒縄工房」より独自の自虐的SM、一人称による告白形式の作品、伝奇SM小説などを発表し続けている。東京在住。

## 目次

公園の人たちの誘惑	6
淫らな自分を見せるとき	38
口内発射	65
輪姦の日	98
女子だけの合宿	127
暴露された性癖	160
調教の日々	194
新しいメンバーたちが	252
即ハメ修業	283
肉便器として	309
延長志願	340

文化祭の裏で	368
お仕置き	396
残酷拷問仕置き	417
AVデビュー	437
全開の穴	461
灼熱の監獄	479
ポニーガール	490
奥付	524

## 公園の人たちの誘惑

私、バカな娘だと思います。

女子校生で勉強はそこそこ。部活は陸上。体を動かすのは嫌いじゃなくて、それでいてチームプレーはムリだから。うちの学校には指導者もいないので、担当の教師のみ。自由です。

「菜津希って、背が高くって足が長いからいいわよねー」なんて、言われるのですが、めちゃくちゃ健康的な女子に見られているようです。

だけど、走っているとき、私はずっと人に言えないような妄想に浸っているのです。

ひたすら走っているとブーツとなつてきて、なんにも考えられないのですが、それでも脳の奥にあるもう一人の菜津希が囁くのです。

「真っ裸で走ってごらんよ。気持ちいいよ。そして、ほら、あの河原で釣りをしているおじさんのところへ行って、こう言うの。『菜津希はスケベなので、おじさんのチンポをおまんこに突っ込んでください』ってね」

それとかワンちゃんを散歩させている人とすれ違ったりしたときも、「菜津希はペットです、どうか一緒に首輪でついでないでお散歩させてください、もちろん全裸で！」なんて思ったり。「ペットのお嫁さんにしてく

ださい、交尾させて！」とか。

すごく変態な妄想ばかり。

汗と汗。股間はぐちやぐちやです。

来る日も来る日も、そういう日々。かれこれ、自分の体というものに目覚め、性を意識するようになってからずっと。

父母も二人の弟も、ごく普通のやつらです。私だけが変態です。

テレビで同じぐらいの年代の子とかが、殺されてしまっているニュースを見ると、めちやくちや不謹慎ですが、ドキドキが止まらないのです。

ご冥福を祈り、自分の身に起きないようにお願いします



るのが普通でしよう。

だけど、私は違う妄想を描いてしまうのです。とて  
も人には言えません。

そして、いまの学校に来てから、妄想はさらにエス  
カレートしてはいますが、それだけではなく、オナニー  
もエスカレートしてはいます。

以前は、妄想は妄想。オナニーは夜、寝静まった部  
屋でこっそり少しだけ。弟たちが隣の部屋にいて声が  
聞こえるわけで、ムードがまったくないからですが、  
日曜日の朝なんて、いいんです。やつらは爆睡してい  
る時間。父母も爆睡しています。

こっそりとその時間に妄想オナニー。といっても指

であそこを擦るぐらいです。

それが、この学校に来て、環境が大きく変わりました。地元の友だち・顔見知りの大半はそのまま地元に近い街中の学校へ進学したのです。この郊外の学校へ移ってきたのは、むしろ少数派でした。

周囲には森林公園、田園、河川敷などがあります。いままでいた街からバスで十分ほどなのに、まったく違う環境。

ランニングをするコースがいっぱい。それだけに妄想も果てしなく、家に帰って窮屈なオナニーで憂さ晴らしをするのがガマンできなくなっていました。

だから、とうとうやってしまったのです。

ランニングシューズとランニングシャツ。外を軽く走るときはその上にトレーニングウェアを着ています。

ガマンできなくなってしまうって、森林公園の中で木々の間の細い小径に入り、人の来そうにないところでウェアを脱いで、シューズとシャツだけになりました。

しばらく体操、クールダウンしているような雰囲気でしたが、人が来そうもないので、シューズに手を入れてあそこを指で確認すると、ぐちよぐちよでした。

ガマンできないので、汚れたままのベンチに座り、そこでオナニーをはじめてしまいました。

誰か来たらどうするか。少しは考えていたのですが、欲情の方が強すぎて、小鼻を膨らませ、声を押し殺し、徹底して擦りあげてしまいました。

「菜津希は悪い子」

そうつぶやいて、燃える股間を冷やすようにショーツをずり下げて、裸のお尻でベンチに腰掛け、足を左右に開いて両手で擦っていきました。

ときどきべつとりとした指のニオイも嗅ぎます。

「淫乱娘だな」

こんなこととしていたら、怖い人に見つかって、ボロボロにされて殺されちゃう。

そう思ったとたん、どろどろと淫液が噴き出して、

アクメに達していました。

「あううん」

子犬のような声を出し、両腕で乳房を左右から抱くようにしながら、体をガクガクさせて楽しみました。

一度、そんなことを経験してしまうと、歯止めが利かなくなっていくます。数日は「もう二度としない」と思っているのに、やっぱりランニングしていてカーツとなつてきて、自然に同じ場所に足が向かいます。

「菜津希がおまんこをパツクリ開いて、オナニーしていたベンチだぞ」

そんな言葉を考えながら、ウェアの上、そして下。バラバラに脱ぎ捨て、ベンチに近づくのです。

「だめよ、そんなかつこうじゃ。全裸になりなさい」  
「でもー」

そう言いながら、ショーツは膝までおろしてしまつています。そしてシャツは乳房の上までめくりあげています。

汗でベタベタの肌。それがすごくイヤラシイ。

「足が長いんだから、そこにまたがってごらんよ」  
ベンチの背にまたがるようにして、股間を落としていきます。

「足を伸ばせよ」

怖いですが、足を伸ばしました。股間にぐいっとベンチの背がくいこみました。

乳房を揉みます。

「こすりつけて、いってみる」

腰を前後に動かしてみます。固いベンチの背。誰が触ったかもわからないそこに、誰にも触らせたことのない果肉を押しつけてしまうのです。いけない。だ、だ、がまんできません。

「はっ」

声が出そうになつてしまいました。

クリトリスを押し潰してしまつたのです。思った以上に力が入ってしまい、がまんできない痛みに襲われました。

「うっ」

醒めてしまい、慌てて脱ぎちらかした服を身につけました。

こういうことをしたせいか、妄想はさらに膨らんでいくのです。

「公園のベンチでオナニーもできないようじゃ、どうしようもないぞ」

菜津希はいつか、それを成功させようと思っているわけです。

きつと、あのままいけば、すごく気持ちよかったはず。

ベッドで指でやさしく撫でていても、「こんなんじゃない」と思ってしまう。



翌日、学校へ行く途中、珍しく開人君が「菜津希、ちよつといいかな」と声をかけてきました。

かなり以前から顔見知り。近所だったから、遊んだこともあります。ですが、もう私も女子校生になつてからは、ほとんど話もしていません。彼氏ではなく、好みでもないし。彼はなんだか、どんどん暗くなつていくんですね。

おまけに最近は一眼レフのカメラを持って出歩いていることが多く、なんだか近寄りがたい感じがしていいました。彼のお父さんがマスコミ関係の仕事をしていらっしゃるらしく、写真に興味を持ったのも、機材が家に一式あつたからだという話を共通の友人から聞きました。

地域の写真コンテストなどで頻繁に受賞しているらしく、本人はかなり本気でカメラマンになりたいらしいです。

郊外の学校へ進学した友人の中に開人がいたのは知っていましたけど、話をするほどではありません。朝練習とかもあるので、バスでも滅多に顔を合わせませんから。

「珍しいね、どうしたの？」

「うん」

メガネをかけて、少し暗く、ニキビが目立つ彼。メガネを指で押し上げてから、意味ありげにスマホを見せてきました。

「あ、最新のでしょ、いいね、見せてよ」

私はなにげなくそれを手に持ち、彼がスイッチを入れたのですが、そこに現れた映像にびっくりしました。思わずスマホを落としそうになりました。彼が私の手ごとしつかり握ってきたので、落とさずにすみませんでした。

「こういうこと、してたらマズイと思うんだよ」

ゴクリと二人同時に生唾を飲みました。

どこから撮ったのでしょうか。木々の間から、望遠レンズでしょうか。顔がはっきり私だとわかってしまいます。そのみっともないほどエロな表情。ゆっくり映像は下に向かいます。短い動画でした。

手で掴んだ乳房。指の間から乳首が顔を出して  
います。ゆがむ腹部。腰。変形した陰部。すらりとした足  
が大きく開いてベンチの背にまたがっている……。

ほかに数枚の写真。

木漏れ日が光と影を演出して、お腹や太ももが真っ  
白に光っていて、あとは影に沈んでいます。

「菜津希は、陸上やってるし、きれいだけど、こんな  
ことを考えるような子じゃないと思っただけだ  
けど……」

返事なんてできません。

恐ろしいことになってしまいました。いたずらを見  
つけたというレベルじゃないでしょう。

「安心して。ぼくはこれで菜津希を脅したりするよう  
なことはしないよ」

「だったらなぜ撮ったのでしよう。もうこれって脅し  
ですけど。」

「あの場で注意するわけにもいかないし、驚かせたり  
したくなかったし。まあ、悪いけどすごく見たかった  
ってのもあるしさ。ゴメンね」

泣きそうになります。

「なにかあったら大変だから、一応、見張っていたん  
だけ。菜津希はすぐにやめたからホツとしたよ」

思った以上に短時間だったのです。

でもしつかり証拠写真を撮られてしまいました。彼

にすべてを見られたのです。

「開人君。私にどうしてほしいの？」

思わず、そんな風に聞いてしまいました。だって、こんな風に問い詰められるのはつらいから。

「菜津希がなにをしているのか、興味がある。ないと  
言えばウソだよ。ぼくたちぐらいの年齢だとみんな  
そうだよ。女ってどうなんだろうってさ。だから、こ  
れからも見守らせてもらおうかなって思うんだけど  
ね」

妙に大人びた言い方。

「それに被写体としては最高だと思う。ぼくの知る限  
り、ホントにいい。だから撮影したい気持ちも強いん

だよね」

勝手なことを……。独占したいのでしょうか。開人だけのモデル、いえ、女になれというのでしょうか。

「菜津希はなにがしたいんだよ。セックス？」  
強烈なパンチです。

私は無言で立ち去りました。返事なんてできません。彼も追いかけてはきません。あの写真を持っている限り、反抗できないとわかっているから……。

ムカツクのです、開人の言い方が。

もし、「おれと付き合え」とか「セックスしようぜ」と言うなら、まだしも。

もちろん、それでも反発したとは思いません。好きで

もないし。みんなに私が彼の女だなんて知られたくないし。

開人はちよつと不気味だしブサイクだし。なにを考えているかわからない暗いやつです。

追いかけてきました。

「待てよ。とりあえず、LINE」

悔しいけど、拒否できません。お互いにLINEでつながることになりました。もう逃げられない感じですよ。

その夜。開人はメッセージを送ってきました。

「おれは菜津希を止めないよ。やりたいことがあるんだろ。やればいいじゃん。ただし、おれに断ってやる



奥付

お読みいただき、ありがとうございました。

二〇一四年六月刊行 第一版 二〇一七年一月 第二版

著作権 あんぷらぐど（荒縄工房）

荒縄工房の情報は下記サイトへ

● ブログ「荒縄工房」

● ホームページ

● 荒縄工房 S M 研究室

● 今日も上機嫌ってわけないだろ

コメント、メッセージ歓迎。ご意見、ご感想、ご提案など随時、ブログで受付中。